

# 平安時代の調査

平安時代には、畑作が行われたようで、畝の痕を発見しました。今後、土壌に含まれる花粉や種子を調べることで、どのような植物が栽培されたか明らかにする予定です。一方、柱穴や井戸など、集落の存在を窺える遺構は検出できませんでした。しかし、集落と畑地は隣接するように検出される場合が多く、人々が住んでいた場所は、付近に存在する可能性が高いと見られます。多数出土した平安時代の須恵器・土師器は、その集落からもたらされたと考えられます。



平安時代の畑のあと

縦横に走る黒い筋が畑作溝、白い部分が畝。繰り返し耕作が行われたことを窺い知ることができます。



まとめて出土した須恵器の水甕

須恵器の水甕が1か所からまとめて出土しました。これらは遠くから運ばれたとは考えにくく、付近に集落があったことを暗示しています。



須恵器の壺（左）と甕（右）

いずれも使用している土が粗く、石が含まれています。このような特徴の須恵器は、笹神丘陵の窯で生産されたものです。

## 須恵器の杯

いずれも肌理の細かな粘土を使用していることが特徴的で、佐渡小泊で生産されたものです。また、これらの須恵器の底面には「王」の字（右下1点）、「三十」の記号（ほか2点）が墨で書かれています。これらの文字や記号が意味することについては、諸説ありますが明らかではありません。



須恵器の杯蓋

笹神丘陵で生産された杯の蓋です。「寺」の字が墨で書かれています。「寺」の字が書かれたものは、寺院から出土することが一般的です。現在の調査範囲は集落外れの畑地ですが、付近の集落に寺院が存在した可能性があります。

# 鎌倉～室町時代の調査

鎌倉～室町時代には調査範囲に集落が築かれたようで、井戸 17 基や掘立柱建物の柱根・柱跡を検出しました。調査範囲が狭く、細長いため、全体像を把握することはできませんが、井戸は非常に良い状態で検出しました。いずれも深さ 60cm ほどと浅いのですが、水が湧き出す砂層に達しており、井戸として十分な深さであったようです。井戸のおよそ半数には曲物が設置されていました。これは、壁面の崩落を防ぐとともに、水を澄ますための装置であったと考えられます。また、これらの井戸は同時に存在したのではなく、何らかの理由を契機に掘っては埋めることを繰り返した結果と考えられます。また、埋め戻し時には、まつりを行っていたようで、その様子を生々しく観察することができました。



**正方形に土留めの矢板が打たれた井戸**

井戸の周囲に矢板を正方形に打ち込み、その内側に曲物を設置した井戸です。曲物は二重構造になっており、外側は土留め、内側は主に水澄まし役割を担ったと見られます。



**井戸を埋め戻す際のまつり？**

この井戸は、底部に設置された曲物の内側には板材が敷き詰められていました。目的は明らかではありませんが、意図的に据えられた様子が分かるかと思います。



**井戸を埋め戻す際のまつり**

井戸の調査を進めると、必ず植物が腐った地層が認められました。これは「ヨシ」と見られます。周辺地域では、現代でも井戸を埋め戻すとき「埋めて良し」に掛けて、梅の種子とヨシを入れているようです。井戸には神様が宿るとされることから、このようなまつりが行われ、現代に引き継がれたものと考えられます。



左は、当時の高級食器である白磁が井戸の底からはほぼ完全な形で出土した様子です。新発田城でも同様の事例があり、まつりのひとつと見られます。右は多数の箸や棒が投げ込まれた様子です。中世には箸を使ったまつりが、しばしば行われます。

